

親子読書のすすめ——安心は子供の読書力を促進する

明日から10月。園庭頭上の柿の実の色づき始め、秋の深まりを感じさせます。店頭秋刀魚はいよいよ太り、食欲をそそります。食欲の秋、スポーツの秋、読書の秋……、秋は、形で私たちの生活に彩りを添えてくれます。そこで、今回はその中の読書の秋にちなんで、親子読書について述べてみようと思います。

親子読書——それは、文字通り親子で行う読書です。といっても、図書館で一緒に本を読むというものではありません。時は就寝前、所は家庭の食卓やこたつ、あるいはお布団の中。本は絵本や童話で、対象は幼児から小学生という、親子で一緒に楽しむ家庭内読書のことです。

大人でも子供でも、自分の用事にひとまずけりがついたときは、ほんの一瞬かもしれませんが、心に安らぎを覚えます。それが、一日の終わり、つまり就寝前ともなれば、その一瞬が「ひととき」に変わります。そのひとときを活用して、5分、あるいは10分、親子で本を楽しもうというものです。

今回は、そんなお勧めです。用意する本は1冊。絵本でも童話でも結構です。以前に読んだことのある本でも、もうすでにお話の筋を知ってしまっている本でもかまいません。決して難しくない、むしろ易しすぎるくらいの本がよいでしょう。昨日読んだばかりの本でも一向にかまいません。

お風呂から上がった子供は、パジャマに着替えて歯磨きを済ませます。そして、本箱から本を1冊探して持ってきます。今日はこの本を読んでもらおうと、自分で決めた1冊です。ゆったりとした気持ちの中で、親子読書が始まります。さまざまな

まずは、お家の人やゆっくりページをめくりながら読み始めます。子供はじっと黙って聞いています。絵本なら、そのページを一緒に見ながら読みましょう。そう、幼稚園でお帰りの前によく行われる読み聞かせです。子供は、絵を見ながらも話に聞き入ります。そして、頭の中にお話の世界をつくり出します。絵はいつの間にか絵でなくなり、実際の風景となって子供を包みます。登場人物も動き始めます。話しもし、歌いもします。音にもおもしろく加わります。想像力が大活躍です。

そのうち子供はまぶたが重くなってきます。ゆったり感と安心感に包まれて、やがて子供は眠り始めます。まだお話は途中なのに。（時として、親の方が先に眠くなります。）しかし、それでいいのです。親子読書のいちばんの役割は、このゆったり感と安心感に包まれながらの親子の心のふれあいです。

ゆったり感と安心感に包まれ想像の世界で遊ぶことの心地よさを知った子は、再びその心地よさを求めます。今日もまた読んでほしいと願います。たった10分という時間です。親としては、家事も残務も見たいテレビもあるでしょうが、それらは10分だけ後延ばしして、このひとときを保障してあげましょう。

やがて子供は、自分一人でも本を手にするようになっていきます。就寝前のあのひとときが保障されているからこそ、土曜日や日曜日などにも自分一人で本を開き始めます。それも、以前お家の人に読んでもらったことのある本を。

これは、幼児が母親からの距離を次第に延ばしていく様とよく似ています。乳児はもちろんのこと、1回目の誕生日を迎えても2回目の誕生日を迎えても、幼児は本能的に母親を求めます。母親の姿が見えなくなれば泣き出します。しかし、母親がそばにいて、ときどき優しく声を掛けたり抱き上げたりしていると、やがて母親から離れて自分で遊び始めます。母親の周りを動き回ります。母親はこの営みを続けます。すると、子供の母親からの距離は次第に長くなっていきます。いつしか母親の姿が見えなくなっても平気になります。それは、子供は、本能的に、自分を見守ってくれる母親、自分を受けとめてくれる母親がそばにいることに安心感を抱いているからです。子供は、心の距離の短さを本能的に確信できているからです。こうして、子供は独り立ちを始めます。

読書も全く同じです。本好きの子になってほしい、読書力を育てたい、そう思うなら、子供がいくつになっても、自分から自然に離れていくまでは親子読書が続けてみたらとお勧めする次第です。

精華だからこそ育める人間関係調整力

「あれ、昨日はリヤカー、今日のごみ。まだ仕事が続いているんですか。」

「ええ、今日のごみの収集日なので、みんなで最後のごみ出しを。」

10月25日、火曜日、朝。PTAの会長、副会長、会計さんが、大きなごみ袋を手に幼稚園の門をくぐります。バザーから4日目、4人の役員さんは、まだ後始末に精を出しています。しかし、成功裏に幕を閉じることができただけに、役員さんたちの足取りも軽やかです。

10月22日(土)は、本園恒例のPTAバザー。みなさんどなたも目の当たりにされたように、園内はとにかく人、人、人。溢れんばかりの人でした。そして、その「人」が、あっちに動き、こっちに動き…。でも、行き交う人の顔はみな笑顔。瞬時の交流なのに、それでもふれあいの心地よさを感じ取っているふうでありました。

ふれあいといえ、園児たちも日々経験しているところです。

本園の園庭は、園児数に対する園庭面積という点においてはもちろん規定はクリアーしていますが、ご案内のように決して広いとは言いきれません。「狭いんだなあ、幼稚園の運動場って。」——私がまだ伝馬町小学校に勤務していた頃のことです。卒業式の案内状を届けに本園を訪ねたことがありました。門をくぐり、園庭に通じる通路を通り終えたとき、目の前に現れた園庭を見て正直そう思いました。

その後縁あって本園経営を担うことになった私は、挨拶のために3月末再び本園を訪れました。「やっぱり狭い。」再度園庭に立ってみた私は、そのときもそう思ったのでした。

平成17年度を迎えました。入園式、始業式を経、いよいよ精華幼稚園が動き出しました。時計が8時半を回ると、園はにわかに活気づきます。お父さん、お母さんに送られ、次々と子どもたちがやってきます。合間合間に到着する2台のバスは、どっと子どもを吐き出します。園庭に通じる通路には自転車はずらりと並び、ただでさえ幅広とはいえない通路は、その幅を一層狭めます。そこへきて子どもたちの乗り物攻勢。大型小型入り乱れての三輪車やスクーターが行き交います。子どもたちはその間を縫うように通り抜けます。当然袖と袖が触れ合います。渋滞も生まれます。遊びが一時ストップします。子どもは何とか渋滞を解消しようとします。三輪車をバックさせる子が現れます。スクーターはハンドルの角度を絞って三輪車の横を通り抜けます。歩行者の子どもは、三輪車やスクーターの動きに合わせて自分の位置を移動させます。そして、通路はまた元の流れを取り戻します。

私は、この一連の動きの中に、子どもたちの素晴らしい育ちを見てとります。渋滞を解消させるために、一步身を引き(譲る)待機する。相手や周りの動きを見ながら、自分の位置や取るべき方策を考える(協力・協調する)。子どもなりに何とか折り合いをつけて局面を打開します。そして、「少しずつの我慢」「少しずつの譲り合い」が集団全体を円滑に機能させることを実感します。子どもたちは、家庭では到底得ることのできないような身の処し方を獲得するのです。途端、私の園庭観は一変しました。

これはほんの一例です。園庭に目を移せば、そこは子どもたちの天国です。お庭の真ん中で縄跳びをしている子どもたち。その脇で水を汲んできてお団子を作っている子どもたち。バトンを持ってリレーをしている子どもたち。それらの間を縫うように走り回る三輪車やスクーター。見ると大型三輪車の乗組員は、年長、年中、年少児が入り混じって構成されています。いつの間にか学年の壁は消え、みんなで楽しさを共有しています。大型三輪車を楽しむにはそれだけの人数が必要で、今の彼らはそれぞれが必要とされる人材であるわけです。ですから、それぞれが尊重され、それぞれが有能感を感じているのです。

園庭の脇には砂場もあります。砂場にも子どもたちが溢れ、ここでもいつの間にかごく自然的に遊びを通じた協調性が育まれます。精華の子どもたちが具(そな)えているぬくもり、うるおい、受容の心。一口で言えば精華のよさ。その育ちには、否応なしに人と触れ合わざるを得ないという園の構造が一役買っているのです。人は一人では生きられません。人は一生人とかわりながら生きていきます。そう考えたとき、この雑多な触れ合いの中で育まれる「人とうまく折り合いをつけていく力」、いうなれば「人間関係調整力」は、生涯を心豊かに歩む上で最も大切な力だということができるでしょう。

(平成17年11月)

聞き上手は、安心と信頼を育む

「おかあさんの詩」全国コンクール2年連続最優秀賞

掛川市立西山口小 内山絵梨さん（5年）

「向き合って」	みのむしふたつ ぐるぐる さむいときわたしは みのむしになって お母さんといっしょに 同じベッドでねむります 布団を体にまきつけて みのむしふたつ ぐるぐる 重なってくっついて ごろごろ あっちへねがえりうたないで 布団がむこうへずれちゃうよ ひっぱるのはたいへんだから わたしにむかってまわってね みのむしふたつ ごろごろ わたしもお母さんのほうに まわるから お母さんもわたしのほうに まわってね そしたらみのむしふたつ ほっかほか あったかいよ 向き合ってねようね
---------	--

この詩 — 「向き合って」。読むたびに、内山絵梨さんがうれしそうにお母さんに語りかけている様子が目に浮かびます。本当に、何回読んでも心がぼかぼかしてきます。「お母さんの詩」全国コンクール2年連続最優秀賞。読んで、納得。読み返して、当然。私自身うれしくて、心から拍手を送りたい気分です。

それも、サトウハチローさんを記念してのコンクール。サトウハチローさんといえば、「灯りをつけましょぼんぼりに お花をあげましょ桃の花……」（うれしいひなまつり）、「ひよこがね おにわでぴよこぴよこかくれんぼ どんなにじょうずにかくれても……」（かわいいかくれんぼ）、「だれかさんがだれかさんが だれかさんが見つけた 小さい秋 小さい秋……」（小さい秋見つけた）など、日本中の誰もが口ずさんだことのある童謡の作詞で有名ですが、一方、お母さんの詩を最も多く書いた詩人としても知られています。そのサトウハチローさんの心を象徴してのコンクールでの受賞ですから、審査員の方々もさぞかしぼかぼかさせられたことでしょう。

さて、この詩の「ぼかぼか」は、いったいどこから生じてくるのでしょうか。私は、その発生元は二つあると考えます。まず一つ目です。一つ目は、詩が作っている世界そのものと言えそうです。「さむいとき」というから、季節はおそらく冬でしょう。その冬のお布団の中は、もうそれだけで暖かさを想像させます。そこへ、用いられる言葉が追い討ちをかけます。「布団を体にまきつけて」「重なってくっついて」「ぐるぐる」「ごろごろ」「ほっかほか あったかいよ」と連記されれば、読む人は誰もが、詩が織り成す世界に誘（いざな）われます。そして、自分自身もその世界に身を浸し、暖まるのです。

次に、二つ目です。二つ目は、この詩の根底に横たわりながら、そこかしこに醸し出される安心と信頼に満ちた親子関係、母子関係と考えます。「みのむしふたつごろごろ わたしもお母さんのほうにまわるから お母さんもわたしのほうにまわってね そしたらみのむしふたつほっかほか あったかいよ 向き合ってねようね」には、何とも素敵なこの親子ならではのぬくもりを感じずにはられません。

では、そのぬくもりはどこから生まれてきたのでしょうか。それは、お母さんの「聞き上手」に端を発しているようです。お母さんはこうおっしゃっています。「日々何かにつけて命令口調になって、追い立てている。その罪滅ぼしもあって、お風呂と一緒に入るとき、寝るときは、お話を聞いてあげよう——。そういうときに、詩のような言葉が出てくるんです。」と。その具体の一例が、次に記されています。「星をつかまえてみたい」「それでその星をどうするの」「みんなにお料理して食べさせてあげる

の」

ここで注目すべきはお母さんの言葉です。— 「それでその星をどうするの」。

私たちは、果たしてこのような言葉が口をついて出てくるでしょうか。「へえ、どうやって。」ぐらいが関の山で、「つかまえられるわけじゃないじゃん。」のような返答が大方でしょう。悪くすれば、「何ばかなこと言ってるの。」などと一蹴し兼ねません。子どもの夢も発想も瞬時に打ち砕かれてしまいます。絵梨さんがお母さんに抱いたような安心と信頼など、微塵も生じません。子どもの心は荒(すき)みの道を歩み始めます。こうしてみると、絵梨さんのお母さんの一言はまさに見事な一言と、改めて思われます。

ところで、絵梨さんのお母さんは、罪滅ぼしの気持ちからこのような受け答えをするようになったようなことをおっしゃっていますが、果たしてそれだけでしょうか。私は、お母さん自身も気付いていらっしゃるかもしれない素晴らしい思いが、お母さんの胸の中に息づいているからだと考えます。その素晴らしい思いとは何か、それは次号で述べることにいたします。

(平成 17 年 12 月)

《シリーズ 賢い親になろう その4》

園長 幾田 光男

受けとめ上手、返し上手、聞き上手の親に

<先月号からの続き>

「それで、その星をどうするの。」—— 子どもの発想を受けとめ、その発想の芽を育て発展させるがための、しかし、当の子どもには何ら負担感を感じさせないようにさり気なく発する一言。しかも、半ば無意識に、まるで条件反射のように瞬時に返す一言。受けとめ上手、返し上手のお母さんならでは、まさに見事な一言です。このお母さんの間髪入れぬ的を射た返しによって、絵梨さんはさらに話を発展させていきます。親子が一体となって作り出したあたたかな空気に包まれて、二人は会話を続けます。このお母さんの受けとめ方、返し方を見事と言わしめるもの、実はそれが、先月号の末尾で「次号で述べることにいたします。」と記した「お母さんの胸の中に息づいている素晴らしい思い」なのです。

その素晴らしい思い—— それは、わが子をわが子として、また、大切な一つの命として、こよなくいとおいしいと思う人間愛的親の愛と考えます。お母さんは、何の躊躇もなく、「それで、その星を……。」と訊きます。絵梨さんは絵梨さんで、これまた何の躊躇もなく即座に「みんなにお料理して食べさせてあげるの。」と答えます。まさに一心同体の受け答えです。

絵梨さんをわが子として心から愛しているお母さんは、わが子絵梨さんを前向き、肯定的にとらえます。絵梨さんの心に寄り添い、絵梨さんの思い一つ一つを共感的に受けとめます。そのお母さんの姿勢、態度は、絵梨さんにお母さんのぬくもりを伝え、絵梨さんを安心という空気で包みます。

お母さんのぬくもりと安心に支えられた絵梨さんは、身も心も、まるで春の光をいっぱい浴びた草木のように、あるいは花から花へと飛び回る蝶のように躍動します。脳裏には新たな想がふつふつと生まれ、生まれた想はどんどんふくらんで、言葉となって表出します。何も気負うことなく、何もてらうことなく、感じたまま、思ったままを言葉にします。だから、「星をつかまえてみたい」と切り出せるのです。

わが子を心から愛し、生けるわが子をこよなくいとおいしいと思うお母さん。そのお母さんの親としての純な思いは、そのまま絵梨さんに注がれ、絵梨さんをして「星をつかまえてみたい」と発想させました。わが子への肯定的な受けとめ姿勢は、自らには「受けとめ上手」、「返し上手」、さらにはこれらが相まって「聞き上手」を、そして、わが子には「安心」と「信頼」と「躍動」を生ませたのです。

わが子の今生きている様子を素晴らしいことだと感じ、素直に丸ごと受け入れられるお母さん、そして、お父さん。こんな親の懐(ふところ)で遊ぶ子は、まさに春の光のように耀き続けることでしょう。

(平成 18 年 1 月)

良識という文化を子どもたちに伝え授けよう

1月16日夕、東京地検特捜部は、証券取引等監視委員会と合同で、ライブドア本社や社長の自宅など関連施設の一斉家宅捜索に乗り出しました。証券取引法違反容疑による、いわゆる強制捜査です。途端、日本列島に激震が走りました。

ライブドア社長といえば、3年くらい前から急激に話題を振り撒き始めた、まさに「時の人」で、経済界における飛ぶ鳥も落とす勢いの躍進ぶりは、若い起業家たちの心を大きく揺さぶったものでした。そして、それからちょうど1週間後の1月23日、今度は社長以下幹部が4人逮捕の報。日本列島は再び激震に見舞われました。

地震は、ライブドア株主たちを直撃しました。株主たちは、大慌てでライブドア株を売り放とうとしました。このことが他の株主たちの焦りを誘い、焦りが焦りを呼んで、市場は大混乱に陥りました。激震は日本経済をも大きく揺さぶったのです。

本震の後は余震です。余震は幾度も襲い来て、彼らの本心を次々と世にさらします。その中に、もう皆さんのお耳に達しているかとは思いますが、聞き捨てならない言葉がありました。―「人の心はお金で買える」―

思いもよらぬ言葉でした。そのような視点など、夢にも描いたことのないものでした。驚きと同時に強烈な腹立たしさが押し寄せました。しかし、それもやがて嘆かわしさ、悲しさに変わっていきました。そして、なんともいえぬ空しさがわが身を包み込みました。「人の心はお金で買える」―この言葉は、テレビやラジオで何回も耳にし、新聞でも目にしました。報道機関もよほど苦々しく思ったのでしょうか。

どうして彼らはこんな言葉を口にしたのでしょうか。短時間で莫大な資産を手にしてしまったからでしょうか。それとも、思うがままに事が運んだからでしょうか。いずれにしてもおごりが生じていたことは事実でしょう。しかし、果たしておごりだけでしょうか。

私は、彼らはどうにこのような言葉を発する感覚は持ち合わせていたと考えます。それは、拝金主義的価値観が彼らを覆い尽くし、彼らの行動判断基準があまりにも世間の常識感覚を逸脱しているからです。

彼らの語録を紐解くと、「金を持っているやつは偉い」「金があれば何でもできる」などというのが出てきます。これらはもう、拝金主義的価値観以外の何ものでもありません。そして、彼らの行動を見てみると、その行動の判断基準は、「法が禁じていない。」に行き着きます。人の心情など基準の中には全く組み入れられていません。

普通、良識ある人間は、このようなことは考えもしません。仮に百歩譲って「思いがよぎった」としても、決して口にはしません。ところが、彼らは、口にするばかりでなく文字にまで記しています。口外すれば、そして、文字に記せば、世間からは大反発を食らうわけですが、そんなことは百も承知だというふうなふるまいです。彼らの価値観から見れば、世間の反発など犬の遠吠えにも及ばないのでしょうか。

辞書によると、良識とは「健全な判断力」とあります。この良識は、人々が、人としてのよりよい生き方を、また、人がよりよく生きることができる社会を求めるとき、幾星霜を経て築き上げてきたものです。ですから、良識はまさに文化です。そして、文化なら、後世に伝え授けていかなければなりません。人を重んじ、心を重んじて、人々に心地よさを提供する良識観。常識をわきまえ、世間の人々からも快く受け入れられる良識観。子どもたちの健やかな成長を願う私たち大人は、今一度自らの良識観を磨き直し、きちんと子どもたちに伝え授けていこうではありませんか。

(平成18年2月)